
一般講演・ポスター発表 P-13

外来種を中心とした淡水カメ類における寄生蠕虫病疫学調査事例

浅川満彦（酪農学園大学獣医学群獣医学類感染・病理学分野獣医寄生虫病学ユニット
/野生動物医学センターWAMC） 連絡先: askam@rakuno.ac.jp

An overview of helminthological survey on freshwater turtles including exotic species to Japan
Mitsuhiro Asakawa (Division of Pathobiology, School of Veterinary Medicine, Rakuno Gakuen
University/Wild Animal Medical Center, Graduate School of Veterinary Medicine, Rakuno
Gakuen University) mail address: askam@rakuno.ac.jp

流通するカメ類には、どのような蠕虫がいるのかを把握するため、江別および札幌の店舗で発生した死体を定期的に入手した。対象動物はカメ目32属53種160体ほか、有鱗目トカゲ亜目ヘビ亜目など計293個体であった。我々が住む北海道の片田舎ですら、様々な爬虫類が入手可能な点に驚かされたが、保有していた内部寄生線虫も興味深いものであった。本発表では、『浅川満彦, 2013. 最近経験した爬虫類における寄生虫病自験事例. 日本獣医師会雑誌, 66: 665-670』を基に紹介する。リクガメ類に寄生する蠕虫類は150種以上記載されるが、水棲カメ類では記録が無かった。しかし、我々の調査で曲頸類2種からも蠕虫類が発見された。虫卵の経口感染により伝播するのでリクガメ類との近接飼育環境では、偶発寄生は普通なのか。非好適な宿主では重篤な蠕虫症を引き起こすので注意したい。Cosmoceroidea上科は蠕虫類で、カメ類では広い宿主域を有する。Atractis属と Labiduris属のAtractidae科は、卵胎生であり自己感染するので、濃厚冠感染を伴った腸炎が知られている。生活史が不明なものが多いが、Kathlaniidae 科の線虫は魚類を中間宿主とするので、与える餌にも注意を払いたい。このグループの線虫の頭部に大型の口腔があり、胃粘膜深部に侵入、同部に潰瘍を形成することから临床上、警戒されている。北米起源とされる宿主種(人工の繁殖施設は別に地域あっても)には*S. trispinosus*が、またユーラシア大陸(日本含?)の宿主種には*S. microcephalus*が見出された。口腔隆起構造物本数が15 から19なのが*S. trispinosus*, 8から10で中央部に欠落部があるのは*S. microcephalus*。ヌマガメには在来の*S. microcephalus*が寄生。外来のミシシippアカミガメでは、京都19個体中10個体、千葉10個体中4個体から*S. microcephalus*が検出され、北米起源の*S. trispinosus*は未検出であった。よって、少なくともアカミによる外来線虫の持ち込み説は否定された。市販/飼育個体および外来種の淡水カメ類を対象に、内部寄生虫の検査をし、疫学・分類学的に非常に貴重な情報が得られた。愛好家の皆様には、もし、不幸にしてお飼いなっているカメが死亡した場合、病原体を調べさせて頂ければ幸いである。